

「浄土アーカイブ」

良智先生は、明治三六年（一九〇三）二月、

「真理の花たば―若き女性への仏教入門―」

佐藤良海上人の長男として生まれた。良海上

佐藤良智を語る

人は知徳兼備の布教家で、大正元年（一九一

赤坂 明翔

二）に宗学教校第四教校（名古屋）の教授を

退任して、小石川光圓寺へ晋山した（後に明

照幼稚園を設立）。良智先生もこれに伴い上京

し、芝中学校・宗教大学本科・大正大学仏教

学科に通った。大正大学の記念すべき第一回

生で、同期に（仏教学）栗本俊道・佐藤密雄、

〔宗教学〕金田明進・中村康隆、〔哲学〕静永

孝英らがいた。大学では椎尾辨匠師のもとで

アビダルマ研究に専念し、主席を栗本と分け

合い、大正大学研究科研究生となった。栗本・

佐藤（密雄）・中村・静永も同じく進学し、こ

の間、皆こぞって真野正順先生の土曜会に参

加して浄土宗の行く末を語り合った。二佐藤

（良智・密雄）は毎週日曜日に荻原雲来師の

自宅に通ってパーリ仏典の講読に没頭した。

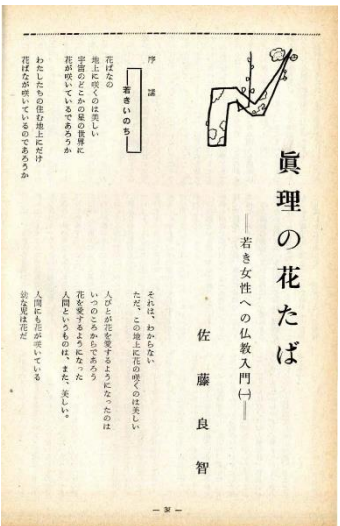
密雄先生は後年、「君と私に取って一番楽しか

ったのは、多摩の荻原先生の所に通った時代

であった。約七年間、途上、多くの夢を抱い

て、研究の前途を語り合った」と述懐してお

り、尊敬する師と切磋琢磨する友に囲まれた、



☆

佐藤良智先生は、法然上人鑽仰会の前会長・

良純先生の師父で、かつて三佐藤（賢順・良

智・密雄）とも呼ばれた碩学の一人である。

これまで「浄土アーカイブ」では中村辨康・

真野正順・友松圓諦の諸師を取り上げたが、

良智先生もまた若くして法然上人鑽仰運動に

参加され、未来の浄土宗を担う人々―特に青

年僧侶―に語り継いでいかなければならない。

今回は、昭和三四年（一九五九）『浄土』一月

号より全九回にわたって連載された「真理の

花たば」（のちに単行本化）を紹介しながら、

この筆を進めていきたい。

☆

青春を謳歌する良智先生の姿が目には浮かんでくる。——嗚呼、素晴らしき青年時代！

昭和七年（一九三二）三月、二十九歳の時、息子良純が誕生する。その頃、二佐藤（良智・密雄）は、荻原師指導による『論事附覚音註』

（パーリ仏典『論事』の翻訳書）の出版準備に苦闘していた。翌年一月、師父良海上人と渡邊海旭師の遷化、二月には母えつが浄土へと旅立った。思わぬことに茫然自失する良智先生であったが、『論事附覚音註』の刊行、光圓寺晋山、明照幼稚園の引き継ぎ等をやりとげた。それから大乘寮（正大の浄土宗学生寮）の設立や大正大学講師に就任と、種々活躍していくのだが、それは別の機会に譲り、戦前の法然上人鑽仰会との関係を見ていきたい。

昭和一〇年四月、鑽仰会設立には良智先生（三二歳）も深く関わっていた。当初の肩書

は組織部。自坊でもすぐに明照幼稚園支部を設立した。また戦前の月刊誌『浄土』の信仰相談といえば中村辨康先生の独壇場であったが、実は創刊号から三号までは、若き良智先生が担当していたことは知られていない。七年間病床にいる男性からの「疑いなく念仏を

申すには如何にすればよいか」との相談には、

「疑いながら煩悶しながらも、それらに怖れずお念仏申され純な真剣な貴殿に安らかな信仰生活の訪れる日を念じます」と、温かい言葉を贈っている。他にも浄土誌友会（読者が集まる会）においては、幻灯映写「法然上人御一代記」を担当した。幻灯機は昨今の映画と違い、静止画をスクリーンに投影してコマずつ場面を変えていくもので、もちろん音声は出ない。良智先生がスライド映像に合わせて法然上人の生涯のナレーションを加えていくという流れだ。先生の語り口調はどんなものであったろうか。

良智先生と戦前の鑽仰会との関係は資料の都合で分からないことも多いが、創設以来のメンバーであったことは間違いない。

☆ ☆ ☆

「真理の花たば」の副題には「―若き女性への仏教入門―」とあるが、男女問わず全ての若者に読んでもらいたい。そして若者を育てる大人が読むべき一冊とも言いたい。「真理の花たば」の前編は、釈尊の教えである七仏通誠偈・三法印・四諦八正道を、後編は、特

に人生の生き方（信機・信法）について、良  
智先生は心に染みる『詩』を織り交ぜながら  
語っている。今回は後篇を取り上げる。

☆

青春はたのしい

人生の春であるから楽しくない筈はない

青春の楽しい声は絶えまなく響いている

若者の青春といえは何だろうか？ 恋愛・友  
情・部活などお決まりのパターンを思い浮か  
べるが、「あの頃に戻りたい」と思えたら、そ  
れは楽しい青春だったといえよう。ただそん  
な青春にも、愁いや寂しさが忍び寄ったこと  
はないだろうか。

親も自分から遠い

友だちも自分から遠い

宗教的な対象も自分から遠い

自分には、なにひとつとして勝れたものがない

誰かが言う。楽しいだけが青春ではないと。

若者がゆえの言い知れないネガティブな感情  
は常に身に潜んでいる。「真理の花たば」の連  
載は昭和三四年だが、その頃よりも令和時代  
の若者（Z世代）の闇は根深くなっている。

インターネットの普及による SNS 利用の爆

発的增加。そのため他者と自分を比べる機会

が多くなり、容姿や才能、家庭環境など生ま  
れの不遇を表現する「親ガチャ」という言葉  
が水面下で拡散した。情報過多の社会におい  
て、若者の悩みはとて複雑かつ繊細化して  
いる。

☆

夢多き青春の人々も、この愁いに沈むうるわしの  
瞳にうつる人生から、まことの人生の一步が始ま  
るのだ。

釈尊は「人生は苦しみ」、善導大師は「罪悪  
生死の凡夫」と言った。若者は知らなければ 3  
ならない。本来人間は力弱い限りのある存在  
であることを。愁いや寂しさに向き合うこと  
で、真実に明るい『まことの人生の一步』が  
始まることを。——ただ、そういつだって弱  
い自己と向き合うのは苦しい。

燃やせ

燃やせ

こころのともしび

人間の心の奥底には、愁いや寂しさに耐え  
て生き抜いていく力（こころのともしび）が  
備わっている。普段はなかなか気づくことが

できない。この小さなもしびは、「生きようとするところ」「幸せになろうとするところ」といえよう。若者こそがもしびの荷い手である。愁いや寂しさのなかでもしびが萌え出づるとき、「真理の花」（花みちしるべ）が咲き誇っていることを知る。

☆

地上のいきとしいけるもの

思いのままに伸びよ

浄きみ仏の国をけがすことなく

清めに清めよ

若者よ、願いを持つとう。清く純粋な願いを。仏さまは二つの大きな願いを持っている。一つは、生きとし生けるものが幸せに明るく伸びること（成就衆生）、二つ目は、国土が平和でより良く清められること（浄仏国土）を。今まさに混迷の令和時代において、仏さまの願いを聞き、自らのともしびを信じて青春・人生を歩んでいこう。心を貧しくするのではなく、こころ豊かにすることで救いの道が開かれるのである。

☆

柳は緑に

花は紅いに

なんといたくましい力であろう

この力こそ生命の根源なのである

この力こそ光明の源泉なのである

宇宙には大きな力（無量寿・無量光）が満ち満ちて、生命を育み救い取ろうとする意志が働いている。これが仏さまの大慈悲であり、阿弥陀さまの本願力とも名付けられる。どんな状況にあっても、阿弥陀さまに支えられ、抱かれて生きていることを知れば、「勇気と生きる力と自信」が自然と湧いてくる。ただ私たちは「なむあみだぶつ」と称えて、安心して阿弥陀さまのもとにとびこめばいい。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

良智先生は教育者であり詩人でもあった。

「真理の花たば」には、そんな先生の人格が

文章から溢れて出ている。

青春を讃える

若きいのち

これこそ花である

咲きほこる人生の花だ、

若きいのちは

讃えても

たたえきれない

麗わしい花だ。

嗚呼、浄土への道を歩むすべての人は、いつまでも悩み多き若者―青春の真つただ中―である。それでこそ信仰に恵まれる幸せの世界がある。私にはそう思えてならない。

『浄土の花たば』はここにある、と。

「大いにやりたまえ」

と先生は言ってくださることだろう。

佐藤良智 プロフィール

さとう・りょうち 明治三十六年（一九〇三）

（昭和五十三年（一九七八））。京都生まれ。仏教学者、教育家、光圓寺住職。大正大学卒業後、昭和一九年大正大学助教授、同二二年教授、同四一年文学部長、同四八年名誉教授となる。昭和七年明照幼稚園長、同理事長。東京都私立幼稚園連合会会長。私立学校教職員共済組合の設立に尽力。文学博士。勲三等瑞宝章を受く。共著に『論事附覚音註』（大東出版社、一九三三）がある。世寿七十五歳。

